



特定非営利活動法人

アジア・アフリカと共に歩む会

南アフリカ共和国貧困地域への教育支援

TAAAの活動日誌 2013年

- ・ 2013-12-05 [南ア在住の頼もしい支援者たち](#)
- ・ 2013-11-01 [仲の良い女性若者グループ](#)
- ・ 2013-10-13 [9月29日 T A A A 報告会のレポート](#)
- ・ 2013-09-25 [生徒が自主運営する学校図書活動](#)
- ・ 2013-09-11 [給食が待ち遠しい！](#)
- ・ 2013-09-06 [多摩大学でのサッカーマニュアル作成](#)
- ・ 2013-09-04 [給食は命綱](#)
- ・ 2013-08-31 [ロゼッテンヴィレ小学校の快挙！](#)
- ・ 2013-08-28 ["NO ALCOHOL, WEAPONS, DRUGS"](#)
- ・ 2013-08-27 [継続で根付く学校菜園](#)
- ・ 2013-08-07 [新規事業として学校・コミュニティ菜園プロジェクトが始まりました](#)
- ・ 2013-07-31 [司書教師研修会](#)
- ・ 2013-07-12 [学校図書支援活動](#)
- ・ 2013-07-04 [JICA横浜の夏休み企画に参加します](#)
- ・ 2013-05-15 [5月12日（日）の活動報告](#)
- ・ 2013-04-30 [昨年度の学校図書活動を振り返って](#)
- ・ 2013-03-28 [サッカーボールを配布しました](#)
- ・ 2013-03-12 [ンドウェドウェ地域の学校を訪ねて](#)
- ・ 2013-02-11 [本の梱包作業の様子](#)
- ・ 2013-01-26 [1月12日にTAAA創立20周年記念報告会・レセプションを行いました](#)

2013-12-05 南アフリカ

南ア在住の頼もしい支援者たち

南アの祝日 Women's Dayの日、ヒバディーンに家族と友人との向かいました。

二つの目的、一つは移動図書館車用の本を事務所で仕分けすること、サンディーレさんのサーフィンレッスンを受けることです。

メンバーは下記の通り。

私、パートナーのアレックス、息子のデニス、白井理恵さん、そのパートナーのグレアム・ピールさん、お二人のお嬢さん リリコちゃん、南アに医療研修に来ていた医学生の藤原稔朗さん。

平林さんが前もって、箱から出して床に積み上げてくださっていたので 仕分けはとてもスムーズにすすみました。

かかっているバックミュージックとともに時にはメロディーをハミングしながら、皆でこれはどの程度の学年にあたるか、この本とても興味深いわ（これは作業の手をとめるので避けたいところですが）などと 本好きな皆とする作業は、とても充実した時間でした。小さな子供二人も飽きることなく、いろいろな本をめくり楽しく時間を過ごしていました。



学校の先生であるグレアムさんの知識も、作業の完了に大きく貢献してくれました。きっと仕分けられた本たちは、それぞれ届けられた学校で、間違いなく有意義に使われることでしょう。

午後いっぱいを割き仕分け作業をしたあとは 山のように積まれていた箱たちがなくなり すっきりとした床に。それからブライヤサンディーレさんお手製のチャカラカなどの美味しい夕ご飯をお腹いっぱい食べ、それぞれの宿に戻りました。翌日はトラファルガービーチの地元の子供たちのサーフィンクラブにジョインして幾人かはサーフィンレッスンを受けました。今回、サンディーレさん自身がサーフィンをする姿を初めてました。すごい、の一言です。水辺の手前にあるかのように見える遠くの大きな波を、端から端まで すーっとボードに立って滑ってゆきました。その後は皆でレストランでランチをとり、砂浜を散歩した後ダーバンへの帰途につきました。

当日は平林さんとのミーティングもあり、現在行なわれているプロジェクトの経過などもお聞きすることができました。何よりも菜園活動の発展には目を見張ります。図書と野菜たち。TAAAの活動のこの二つの重要なキーポイントは 間違いなく今の南アフリカの学校に必要とされるものだと信じてやみません。

日本でボランティアで活動をされている皆さん、寄付をつのってくださっている個人および団体の方々、ありがとうございます。南アでこのように出来る限り私たちもお手伝いを続けさせていただきたいと思っています。

どうぞよろしくお願ひいたします。

(中地明子)

[Page Top ▲](#)

2013-11-01 南アフリカ

仲の良い女性若者グループ

今年の8月から始まった学校・コミュニティ有機菜園事業は順調に進んでいます。

学校菜園の対象校は40校ですが、そのうちの4つの学校の敷地を借りて、4つの若者グループが有機菜園活動を行っています。 この地域は牛を放し飼いにしているので、フェンスがないと畑が牛に荒らされてしまいます。 また作物が盗まれないためにも、菜園活動はフェンスのある学校の敷地内が一番適しています。

学校の他にインフラのない南アの遠隔地域では、学校はコミュニティの中心的役割を果たしていて、地域住民にはとても協力的です。 テュルベケ小学校も気前よく敷地の一部をコミュニティ菜

園用に使わせてくれることになりました。ここで結成された若者グループ、テュルベケ・グループは女性だけの若者グループです。若者といつてもお母さん多く、一家の大黒柱もいます。

この2年半のプロジェクトで、しっかり有機菜園技術を学んだあとは、自分たちでコミュニティ菜園や家庭菜園を作り自家消費用に充て、また余剰作物は地域で販売して生計に繋げていく予定です。学校の教室をかりて、有機菜園の知識を深めるための研修会も行っていますが、みな真剣に参加しています。



女性グループの利点は、とても仲が良くて、助け合いの精神でグループでがんばるところ。男性が不在がちな南アの遠隔地域における女性たちの絆は、半端ではありません。

(平林・久我)

[Page Top ▲](#)

2013-10-13 日本

9月29日TAAA報告会のレポート



9月29日（日）にTAAAの報告会を開催しました。会場は、広尾から市ヶ谷に昨年移転したJICA地球ひろばでした。

TAAAの報告会では、毎回、南ア事務所代表の平林さんの活動報告のほか、さまざまなゲスト講師を招いてお話を伺っています。今回は、津山直子さんをゲストに迎え、「反アパルトヘイト運動と、日本のNGO活動とのつながり」についてお話しいただきました。津山さんは、1980年代後半から90年代はじめにかけてアフリカ民族会議（ANC）の東京事務所に勤務し、その後15年以上にわたり日本国際ボランティア・センター（JVC）の南アフリカ現地代表を務めるなど、長年、南アフリカに市民の立場から関わってこられた方です。

津山さんはまず、ネルソン・マンデラ財団のCEO、セロ・ハッタン氏と、元フリーダム・ファイターで、アパルトヘイト廃止後、ハウテン州知事や住宅大臣などを歴任したトーキョー・セクワレ氏らが2013年8月に来日した際、TAAA代表の久我さんが懇談会に参加したことを紹介しました。この懇談会は、図らずも、日本で反アパルトヘイト運動に参加していた人たちと、アパルトヘイト後の南アフリカに関わる活動をしている人たちとが、お互いのことを知り、反アパルトヘイト運動と、現在のNGO活動のつながりを考えるよい機会となつたそうです。

津山さんは、南アフリカの人種差別の歴史を紹介しながら、そこに日本（人）がどう関わってきたのかを振り返りました。日本人が南アフリカで「名譽白人」と呼ばれたこと、それを恥とする市民が日本各地で反アパルトヘイト運動を展開したことが紹介されました。南アフリカからのゲストの

招聘、「名譽白人」問題への取り組み、南アフリカ製品のボイコット運動など、具体的な活動内容については、アフリカ行動委員会（東京の反アパルトヘイト運動組織）の事務局に勤務されていた上林陽治さんからも補足説明がありました。

南アフリカでのNGO活動の開始のきっかけは、1990年にネルソン・マンデラが釈放され、アパルトヘイト廃止に向けて南アフリカが動き出したことでした。反アパルトヘイト運動に関わっていた人々は、それまで南アフリカに行くことができなかつたのですが（南ア政府がビザを発給しないため）、1990年以降、南アフリカに直接入り、現地の人たちと関係をつくることができるようになりました。

「南ア黒人の教育を支える会」（のちに「南部アフリカの教育を支える会」と改称）が1990年に、続いてTAAAが1992年に設立され、津山さんをスタッフに迎えたJVCも活動を開始しました。その後も、HIV陽性者支援を担う「ニバリレキレ」のような、新しい活動も生まれています。反アパルトヘイト運動をしていた人がNGO活動に入っていくというつながり（津山さんの例だけでなく、TAAAも、平林さんはANC東京事務所の職員、久我さんとTAAA前代表の野田さんはボランティアだったというつながりがあります）、さらに、反アパルトヘイト運動を通じてつくられた南アフリカと日本の市民の関係が、その後のNGO活動の土台になってきたということが、津山さんのお話から浮かび上がりました。

後半は平林さんの活動報告でした。平林さんはまず、南アフリカの近況として、民主化から20年が経とうというのに、経済格差、社会インフラ整備の遅れ、鉱山労働者の劣悪な労働条件など、さまざまな問題があり、人びとの不満や苛立ちがストライキや外国人襲撃のような形で噴出していることを紹介しました。また、交通事故が多発し、多くの命が失われていることから、TAAAの活動車輌のドライバーに対して、ルールを守り安全運転をするよう徹底していることが報告されました。

教育現場にも問題が多く、学校内での教員組合間の対立が学校改善の妨げになっている例もあるといいます。TAAAではそうした力関係に巻き込まれないように、あくまで中立の立場を貫いて活動しているという説明がありました。そして、TAAAが活動している学校の先生が、あるとき平林さんに、「NGOで働くにはどうしたらいいか」と尋ねてきたエピソードが紹介されました。その先生曰く、「教育以前の問題が大きく、子どもの生活をケアしなければならない状況がある」そうで、そのためには、様々な制約に縛られる教師の立場よりも、NGOのほうが柔軟にきめこまかい仕事ができると思われたようです。このエピソードは、TAAAの活動が地域のニーズにあってること、平林さんが現地の人たちに信頼されていることの証左といえるのではないでしょうか。

さて、TAAAの現在の活動地は、クワズールー・ナタール州ウグ郡のヒバディーン地域にあります。平林さんより、豊富な写真を交えた活動紹介がありました。図書活動としては、国際ボランティア貯金の助成により32校を対象に移動図書館車の巡回をしているほか、コンテナ図書館、本棚、英語の本の寄贈をしています。図書活動の進み具合は学校によって異なりますが、先生方と十分に話し合って、それぞれの学校の状況にあわせた支援を心がけているという話がありました。

また、この8月からは、JICAの草の根技術協力事業として「学校を拠点とした有機農業促進のモデル地域づくり」プロジェクトが始まっています。菜園活動には、対象校40校の学校の生徒だけでなく、地域の方たちも参加しており、なかには（通常は農業に携わることが少ない）男性のグループもあるそうです。また、本プロジェクトで実践している有機農業に州農業省が関心を示し、研修の依頼がきているとのことでした。TAAAから送られたサッカーボールや算数セットが喜ばれ、活用されている様子も紹介されました。

報告会は、日曜日の午前中にもかかわらず、30名近くの参加者があり、大盛況でした。報告会後

は、同じ建物内のJ's Cafeでランチを食べながら懇親会が行われました。

(牧野久美子)

[Page Top ▲](#)

2013-09-25 南アフリカ

生徒が自主運営する学校図書活動

私たちの活動の最終目的は、各対象校がプロジェクトを継続的に自主運営できる状態にすることです。そのためには、図書環境を整えることはもちろんのこと、司書教師と図書委員会生徒たちが学校図書の意義をしっかりと理解し、図書運営能力を身につけること、そしてその運営力が引き継がれていくシステム作りが重要です。

このことは、日本ではそれほど難しいことではないでしょう。しかし、教師たちが育っていく過程で学校に図書室がないことが「あたりまえ」の状態だった南アの遠隔地域においては、時間と労力のかかるプロセスです。

まずは、司書教師たちに基礎的な司書技能を身につけてもらうのと同時に、学校図書の意義を確認してもらいます。そのため、司書教師対象の研修会が活動の要となります。



昨年コンテナ図書室を寄贈したルテウーリ高校は、ほぼ完璧に自主運営能力を身につけた成功例の一つでした。司書教師のマカンヤ先生と一緒にコンテナ図書室を訪問すると、7人の男女の図書委員会生徒たちが、図書室を管理していました。彼ら図書委員会生徒たちは、休み時間と放課後の一時間はかならず図書室に来て、本の貸し出しをしたり整理をしたりしているのです。

「私は彼らのスーパーバイザー」というマカンヤ先生は、「図書室運営は、できるだけ生徒に任せています。それによって、彼らの運営能力が磨かれるだけでなく、自主性が育つからね」。

図書室の壁には貸し出しルールの紙が貼っていました。これも図書委員会の生徒たちが自分たちだけで考えて作成したこと。その他、手作りの貸し出しカードを作ったりと、マカンヤ先生の監督の下、クリエイティブな仕事をしていました。

本が詰まった段ボール2箱を寄贈すると、生徒達はせっせと本棚に並べはじめました。まるで、部活動のように楽しそうです。一日に少なくとも50人の生徒が本をかりるといっていました。参考書の貸し出しあは1日、小説は一週間借りられるとのこと。

「私たちの図書室は日に日に良くなっています」と男子生徒。この言葉は、どんな感謝の言葉より、嬉しかったです。「後輩たちは、彼らから図書運営方法を学んでいくのだな」と、頼もしい先輩たちを見ながら、私たちが手を引いた後も、しっかりと図書プロジェクトが継続的に自主運営していくことを確信できた学校でした。

(久我)

[Page Top ▲](#)

2013-09-11 南アフリカ

給食が待ち遠しい!

比較的中心地に近いところにあるゴベラ小学校を訪問しました。生徒数が1,200人以上の大きな小学校で、菜園と図書プロジェクトの対象校です。私たちが着いてしばらくすると、給食の時間になりました。生徒たちは一斉に教室から飛びだしきたと思うと、お行儀よく列を作りました。給食当番の生徒二人がバケツを運んできて、配膳を始めました。



主食のパップ（とうもろこしの粉を煮て練ったもの）と煮たカボチャという質素なメニュー。一人の量もとても少ないので気になりました。それでも、生徒たちは、おなかがペコペコなのでしょう。ワクワクしながら待っています。感心したのは、みな辛抱強く自分の番を待っていて、誰一人われ先にと列を乱す生徒がいなかったこと。

外で座って仲良く食べていました。



菜園担当のムーサ先生に聞くと、ゴベラ小学校も一日一食、給食だけが食事の生徒がとても多いとのこと。本当に栄養が足りません。菜園から収穫がある時は、給食に野菜スープが添えられるそうですが、今は乾期。しかも今年は異常気象で例年と比べて極端に雨量が少ないなど、地球温暖化がこの地域にも悪影響を及ぼしています。しかし、もう少しの辛抱です。乾期が終わると、菜園にやさしいシーズンがやってきます。具だくさんの野菜スープが登場する日も近いでしょう。

収穫物は主に給食に使われますが、余剰は、保護者のいない生徒に配給しているとのこと。対象地域には、近所に助けられながら子供たちだけで暮らす孤児家庭（Child-headed family）が多く、学校も出来る限りのサポートをしています。

南アの地方の先生たちはソーシャルワークも兼務しているのです。

優秀な先生が多いのでしょう。図書活動の方もしっかりやっている学校でした。

(久我)

[Page Top ▲](#)

2013-09-06 日本

多摩大学でのサッカーマニュアル作成

8月20日（火）15：00～18：00 多摩大学の体育館でTHANK球プロジェクトが南アフリカの生徒たちのために、サッカーの指導マニュアルのDVDを作成しました。THANK球プロジェクトは多摩大学の卒業生や現役のフットサル部員の皆さんからなるボランティア団体です。サッカーを通じて、南アフリカやラオスや日本国内で、指導したり、ボールをプレゼントしたりすることで

青少年のサッカーの推進に貢献しています。

これまで1500個位のサッカーボールを集めて、当TAAAを通じて、南アフリカの子どもたちに送ってきました。南アのTAAAが活動している地域では、ボールもユニホームも靴も十分に揃っていません。ポリ袋を丸めて、ひもで縛って作ったボールでサッカーをする子どもたちもいます。昨年、THAN球プロジェクトの森直之さんと堀田浩平さんも南アのTAAAの活動地域の学校を訪問しました。渡したサッカーボールで子どもたちはすぐ、サッカーを始めました。初めてサッカーに挑戦した女子生徒も素晴らしい運動能力でサッカーを楽しんでいました。サッカーの指導員の資格を持つ堀田さんも森さんも子どもたちの動きを見ていて、少しサッカーの技術を教えてあげられたら、ぐんと力が伸びるだろうと思ったそうです。



そこで、帰国後、サッカーの技術を学んでもらえるマニュアルとしてDVDを作成すること始めました。今日はその第2部を作成するために、森さん、堀田さん、そして多摩大学の1年生のフットサル部員の大戸さんと渡邊さんが多摩大学の体育館に集まりました。サッカー未経験の野田は、見学がてら助手として参加しました。

初めて訪れた多摩大学は丘陵に建てられた緑の多い美しい学園です。到着するとすぐに体育館の真ん中に三脚とビデオが備えてありました。森さんは監督とカメラマン。堀田さんが技術のお手本を演じる主役です。1年生のお二人は堀田さんの動きをまねて、生徒役を勤められました。私は開始の合図をする助手です。

くるぶしから下の動きだけでも、アウトサイド（外側）インサイド、ヒール、足の裏など、それも左足、右足、いろいろな組み合わせでボールをドリブルしたり、蹴ったり転がしたりするので、技術の種類は、数10種類に及びます。堀田コーチが10mほど離れた所から、インサイドドリブルをしながら、カメラに近づいてきます。大戸さんは斜め後ろで同じ動きをし、渡邊さんが堀田さんのすぐ後ろから同じドリブルをしてやってきます。森監督からなかなかOKが出なくて、何回も撮り直す場面もありました。中学でサッカーチームだった大戸さんも高校で陸上だった渡邊さんも、運動能力は優れているけれど、サッカーの細部にわたる技術については、まだフットサル部の新入生です。先輩コーチのようにはうまく行きません。堀田さんと森さんのアドバイスを受けながら、汗だくでトライし、やっとOKが出ると私もほっとしました。

15分の休憩をはさんで、3時間、各種のサッカーの技術を休むことなく、続けました。暑い、暑い、と言いながら、ねばり強く辛抱強く、妥協せず、取り組む素晴らしいコーチと監督と後輩たちでした。スポーツ界で話題となつた乱暴な物言いは一切なく、何回かの失敗にも親切に助言し、労い合い、そして後輩たちも真摯に受け入れ、努力を重ねていく姿に感動しました。

素晴らしいマニュアルが出来上がることと思います。南アの子どもたちや先生がこれを使って技を磨き、南アのサッカー最強のチームがウグンダから出る日も近いと思います。写真は後列左から、大戸さん、堀田さん、渡邊さん、前列、森さん、野田です。

(野田千香子)

2013-09-04 南アフリカ

給食は命綱

今回の視察で一番心配になったことは、対象地域の子供たちの栄養不足でした。 学校で楽しそうにはしゃいでいる彼らですが、家庭の経済事情はかなり厳しくて、「給食が一日で唯一の食事」という子供たちも多いのです。 そうではなくても、給食が一日の主な栄養源であることが、先生たちの話で分かりました。



しかし、その命綱である給食が質量ともに不十分です。これは、山岳地域にある電気も水道もないハイマン小学校の一クラスの給食です。 授業が終わると、給食当番が一人一人のお皿に均等に配膳します。 ごはんとお豆のカレー。 少なくとも30人はいるクラスですので、一人分はごく僅かです。

生徒たちの年齢を聞くと、7、8歳ぐらいに見える生徒たちが、13歳、14歳と小さな声で答えました。 年齢を聞くのはやめました。

8月から始まったJICA草の根技術協力事業である有機菜園プロジェクトでは、ハイマン小学校も対象校です。 水道やタンクはありませんが、幸い通学路に川があるので、生徒たちは川で水を汲んで登校できます。

換金作物用のさとうきび畑が広がる対象地域は、肥沃な地域は白人大農園主に取られていて、地元民の集落や学校は、掘ってみると岩だらけと農業に不適な「使えない」土地があてがわれているところがあります。 その場合は、どんなに菜園を始めたくても不可能です。 幸い、この小学校の畑は、菜園ができるような土壌です。 学校菜園で収穫されるジャガイモや人参やキャベツが、給食のシチューに入るだけでも、かなりの栄養改善になると思います。 しかし、一日一食は育ち盛りには厳しいです。

(久我)

[Page Top ▲](#)

2013-08-31 南アフリカ

ロゼッテンヴィレ小学校の快挙！

ロゼッテンヴィレ小学校での図書プロジェクトは3年目になります。 ここまでくると、相当な読書家の生徒がでてきます。 テレビやDS、ゲームなど他に娯楽のない地域です。 本好きの生徒たちは、学校から借りてきた1,2冊の本を宝物のように大事にして、返すころには暗誦できる程に何度も何度も繰り返し読んでいるようです。 ある意味、安易な娯楽のないこの地域は、一冊の本とことん向き合うには、いい環境といえるかもしれません。



嬉しいことに、司書教師のムラング先生から、州教育省主催の地区内リーディング・コンテストでは、6学年が「英語の本暗誦の部」で2位を獲得したという快挙を知らされました。

「生徒たちの読解力が飛躍的に伸びたのは、TAAAの図書プロジェクトのお陰」といってくれましたが、第一にはなんといっても先生達の努力があるでしょう。

ムラング先生は、コンテストに出場した生徒を集めて、発表会をしてくれました。 短い英語の物語の暗誦、ズールー語の暗誦、ディベート。それぞれが力強く素晴らしいです。

とりを務めたのが写真の歌姫さん。 澄んだソプラノで英語のオールディーズを披露してくれました。 黒板に飾られている単語カードは、先生や生たちによる手作り教材で、教室の壁一面にもクリエイティブな教材が貼られていました。

日頃こういう努力をしている学校だからこそ、私達が送る本をしっかりと活用してくれていて、それがコンテストの快挙に繋がったのだと思いました。

これはよくあることですが、発表してくれた生徒は全員女の子でした。

後日、この学校から「男の子の読書推進クラブ」が結成されたとの情報がありました。

今後は男の子の活躍にも期待したいです。

(久我)

[Page Top ▲](#)

2013-08-28 南アフリカ

"NO ALCOHOL, WEAPONS, DRUGS"

訪れた小学校の敷地に立てたっていた看板です。 広大なサトウキビ畑の合間に民家がポツンポツンと点在する、一見のどかな遠隔地域にある対象校。学校の他にこれといったリソースはありません。 しかし、このような奥まったところにも、ドラッグ、アルコール、武器といった問題は存在し、「それらを持ち込むな」と、小学生に訴えなければならない程に深刻化している様です。 小学生といつても、諸事情で入学が遅れたため、20歳かい生徒も在籍しているので、こういう問題が起こりやすい現状もあります。



校長先生にお聞きすると、やはり問題は年々深刻化していて、生活科の授業などで、これらがいかに個人やコミュニティを滅ぼすかを熱心に教えているそうです。

南アは超格差社会です。 特に、都会と私達の対象地域のような遠隔地では、2つの別世界といつていいでしょう。そして、格差は縮まるどころか拡大し、地方の貧困地域は取り残されていく一方です。

しかし、悲しいことに、このような都会の悪い部分だけはいとも簡単に地方に入ってきてているのが現状です。 ただ、この地域には、熱心にそれらを防いで子供たちを守ろうとする学校のがんばりがあり、そこに希望を託したいです。

(久我)

2013-08-27 南アフリカ

継続で根付く学校菜園



8月18日～25日の間、プロジェクト視察のため南アを訪問しました。8月1日から正式に始まったJICA草の根技術協力事業「有機農業促進のモデル地域作り」の視察と地元関係者とのミーティングを中心とした訪問になりました。

今回のプロジェクトでは、小学校で菜園活動をして有機菜園技術を学んだ生徒たちが上の学校に移っても菜園活動が継続できるように、隣接するジュニアプライマリ、シニアプライマリ、高校に菜園活動を実施します。 継続することで活動が根付き、高校卒業後、有機農業で生計を立て、他のコミュニティーメンバーに技術や知識を伝えられるような地元のリーダーを育てることを目的としています。 それには、対象校がプロジェクト後に自立して有機菜園活動を持続できるシステム作りが鍵となります。その基盤として、まず最初に、各校に校長、菜園担当教師、メンバーや生徒、保護者からなる菜園委員会を設立してもらいました。

最初に訪問したのは、ウムズンベ学区のシボンギムフンド高校（8学年から12学年）です。 ここは、先行プロジェクトでも対象校だったロゼッテンヴィレ小学校（ジュニアとシニアを合わせたフル・プライマリ）の卒業生が通う学校です。 菜園委員会メンバーの生徒のなかには、ロゼッターンヴィレ小で菜園活動をしていた生徒たちも含まれていました。

6月～8月の間は雨の降らない乾燥期で、どの学校も水不足に悩みますが、幸い歩いて15分ぐらいのところに川のある水に恵まれた学校です。

農業巡回指導員である3人の地元TAAAスタッフが、学校の畑で丁寧に生徒たちに苗床作りを教えました。 小学校のときから菜園活動をしていない高校生の場合、高校でいきなり畑仕事をするのは心理的にかなりハードルが高いのですが、ここは菜園に馴染んだロゼッテンヴィレ小の卒業生がいます。 彼ら先輩に刺激を受けたビギナー生徒たちも積極的に技術を学んでいました。

高校での活動の場合、農業巡回指導員が3人とも若い男性であることには多くの利点があります。「畑仕事は女性の仕事」という偏見の強い当地域で男子生徒たちが参加しやすくなることと、年齢差がかけ離れていないため生徒たちも気兼ねなく質問できるようになることなど。

若者のコミュニティー・イベントのようなノリで、始終、楽しそうに活動が行われていました。

(久我祐子)

2013-08-07 南アフリカ

新規事業として学校・コミュニティ菜園プロジェクトが始まりました

8月1日より、新規にJICA草の根技術協力事業として学校・コミュニティ菜園プロジェクトが始まりました。事業名は「有機農業促進のモデル地域作り」で、対象地域はウグ郡のムタルメ・トゥートン・ウムズンベの隣接する3学区です。

2012年12月末に終了した学校・コミュニティプロジェクトは、同じウグ郡内でも離れた3地域で行いましたが、今回は対象地域を一地域に集約し、モデル地域作りを目指します。対象校40校に加えて、卒業生グループ4グループが菜園活動を実施していきます。



南アの遠隔地域における“緊急課題”である若者の雇用促進への取り組みとして、対象校4校の敷地内に実習農園を設置し、各校の卒業生メンバーが、将来地元で小規模農業で自活できるように、有機農業の基礎的知識と技術を学んでいきます。

また、保護者会で有機菜園の研修会を行うなど、保護者を通して積極的にコミュニティにおける家庭菜園を促進していきます。

学校やコミュニティで人を育てていくことで、対象地域が有機農業促進のモデルとなり、将来的に事業の取り組みが他地域でも取り入れられるようになることを目指します。

(TAAA南ア事務所 平林薰 久我編集)

[Page Top ▲](#)

2013-07-31 南アフリカ

司書教師研修会

TAAAの活動の特徴の一つに“研修会を重視する”ことが挙げられると思います。 研修会は、技術や知識を教えるだけでなく、支援対象者にプロジェクトの意義や可能性をより深く認識させ意識を向上させる効果があり、プロジェクト終了後も自発的、継続的なスキルアップの鍵となります。 このため各活動プロジェクトには必ず定期研修会を組み込み、その準備にかなり注力しています。



学校図書支援活動では、定期的に司書教師研修を行っています。対象校の教師は、自分たちが生徒だった頃に学校図書室のない環境で育ってきたため、図書室の役割と意義をしっかりと認識してもらう必要があります。

基礎的な本の分類方法や運営のノウハウなど司書の基礎的な仕事を習得するだけでなく、生徒の読書への興味の引き出し方や授業での図書の活用法なども指導します。

また、研修会は、学校間の教師の交流や学び合いの場にもなっています。

新規対象校16校はやる気満々で、研修会開催の前に、校長と司書教師が早速図書委員会を設置して活動への準備を整えていました。研修会では、“2年目の学校に追いつくようがんばりましょう”と伝え、2年目の学校には“新規対象校がやる気を見せてますよ”と話すと“今年は力を入れて活動するからね”との反応がありました。頬もしい限りです。

(TAAA南ア事務所 平林薰 久我編集)

[Page Top ▲](#)

2013-07-12 南アフリカ

学校図書支援活動

4月から新規で始まった学校図書活動支援プロジェクトは、順調に進捗しています。今年度は、昨年度の3地域から1地域に絞り、32校を対象として移動図書館車で巡回訪問指導をしています。

対象地域であるムタルメ・トゥートン・ウムズンベの3学区は、沿岸部から山岳部までの広い地域でそれぞれ環境が異なります。図書に関する各学校の環境もそれぞれかなり異なるため、各学校のニーズに合わせた、きめ細やかな支援をしていこうと思っています。



本だけでなく、算数セットも配布しています。日本の低学年が使う算数セットはとてもよく出来ていて、教師や生徒たちから大変喜ばれています。

日本で常時中古の算数セットを集めていますが、「子供が使っていたけれどももったいない」と個人の方や「声をかけて集めました」とPTAの方々など、全国から寄せられています。
ありがとうございます。今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。

(TAAA南ア事務所 平林薰 久我編集)

[Page Top ▲](#)

2013-07-04 日本

JICA横浜の夏休み企画に参加します

7月6日から9月1日まで、[「JICAよこはま」](#)にて、JICA横浜、横浜市、FAO日本事務所、国連WFP協会の共催で「アフリカ一手をつないで前へー」という題の夏休みイベントが開催されます。

これは、第4回・第5回アフリカ開発会議の横浜開催を通して培ったアフリカとの関係性を発展させることを目的に、一般市民が広くアフリカに関心を持ち、学ぶきっかけを作ることを目的としています。



TAAAは、このイベントに展示参加することで協力することになり、今日は展示のセッティングに

行きました。学校・コミュニティー菜園活動を中心に、現地の様子がイキイキと伝わる写真を飾りました。開催中はアフリカに関連した様々なイベントも開催されます。皆さま、是非足を運ばれて、大きな写真からTAAAの活動を感じ取ってくださいませ。

[【チラシ】2013年夏休み企画@JICA横浜 アフリカ一手をつないで前へ一 \(PDF形式／1.87MB\)](#)

(久我祐子)

[Page Top ▲](#)

2013-05-15 日本

5月12日（日）の活動報告



『定例作業』

午前中は、南アフリカに送る英語の本の梱包作業を行いました。参加者は、野田さん。浅見さん。北爪さん。平林さん。大友さん。西村さん。鯨井の7名でした。

南アフリカ事務所から、本のレベル分け（園児用・児童用・生徒用・専門書など）梱包の希望が出ており、平林さんの指導の下、細かいレベル分けの方針が決まりました。

4月19日に、久我さんと大友さんが、事前に大量の本のレベル分けを行ってくださいり、それを、みんなみんながもくもくとダンボールに梱包していきました。レベル分けのお蔭で、作業もスムーズに済りました。

『帰国報告会』

午後は、T A A A 南アフリカ現地代表 平林薰さんの帰国報告会を行いました。

参加者は、野田さん。浅見さん。北爪さん。平林さん。大友さん。西村さん。久我さん。高野さん。鯨井の9名でした。

まず、平林さんから現在の南アフリカの状況について、報告がありました。教育関係では、初等教育大臣の進退が問題になっているとのことで、5月下旬までに結論が出るとのことでした。

医療関係では、病院に関する問題が報告されていました。所得により、受ける医療の格差が如実に表れ、貧しい人は満足な医療を受けられないとの、報告がありました。

次は、スライドショーを使っての、プロジェクトの実施状況についての報告でした。

2013年より、支援地域を、クワズールー・ナタール州ウグ郡のムタルメ・トウートン学区に絞り、菜園プロジェクトと図書支援プロジェクトを同じ学校で実施し、よりキメ細かい支援を行っていく、方針が述べられました。その中で菜園プロジェクトのファシリテーター、リチャードさんが、南アフリカの新聞の日曜版で紹介されたとの報告がありました。

TAAAの移動図書館車『ITHEMBA（希望）』号は大変人気で、学校に到着すると子供たちが、鈴なりになって借りる本を物色し、学校に本が大変少なく子供たちが本に“飢えている”様子が写真から見て取れました。

また、教員に対する、図書の研修を行っている様子も紹介されました。

南アフリカの学校は本が大変少なく、TAAAも20年かけて、39万冊以上の本を寄贈してきましたが、全然足りていないのが現状です。また、図書室の不備や本棚やブックエンドも不足しており、支援の難しさを改めて認識させられました。

南アフリカ国内でも、リンポポ州で起きた教科書の紛失事件が物語っているように、政府レベルで図書を含む教育問題に真剣に取り組まない限り、TAAAがいくら図書プロジェクトを行っても、“焼け石に水”状態が延々と続く、悲しい現実が垣間見れた報告会でした。

(鯨井幸一)

[Page Top ▲](#)

2013-04-30 南アフリカ

昨年度の学校図書活動を振り返って



昨年度（2012年4月～2013年3月）の図書活動を振り返ってみると、1年間で、図書環境といったハード面だけでなく、生徒達の読書力や司書教師の図書管理・運営力といった能力面が大きく向上したことを実感します。

知識や経験の乏しい司書教師に対して、学校図書室の管理、利用法について基礎から指導する研修会は効果が大きかったです

各対象校の司書教師は、事業により学校での図書活動の基礎が築かれたことから、今後は図書委員会のメンバーを中心に校内で読書の促進を図っていきたいと意欲を見せています。

今年度は、対象地域を変えて、図書環境がまだ未改善の学校を中心に図書活動を行いますが、昨年度の経験や現地の声を生かして、自立へ向けての働きかけをしていきたいと思っています。

左の写真は、相撲の本を嬉しそうに借りる生徒です。移動図書館車には日本に関する本も多く搭載していることから、日本文化に興味を持つようになった生徒も現れました。ウグ郡のような外部から見放されたような閉ざされた貧困地域において、学校の図書活動は、唯一外国の文化に触れるツールになっています。

(TAAA南ア事務所 平林薰 久我編集)

[Page Top ▲](#)

2013-03-28 南アフリカ

サッカーボールを配布しました



日本から送られてきたサッカーボールを対象校に配布しました。

別途国際小包で送られてきた埼玉産のユニホームは、昨年8月のイベントで活躍したカンヤ高校に寄贈しました。ゴールキーパーは、“URAWA”と書かれたカラフルなユニフォームをとても気に入ってくれたようで、自慢げにポーズを決めてくれました。

8月に訪問しサッカー技術指導をしたTAAAメンバーが、現地のレベルに合わせた基本的な練習マニュアルを作成してくれました。それを担当教師に配布したところ、大変喜ばれ、本格的にコーチングの勉強をしたいという教師も出てきました。

TAAAが行うサッカープロジェクトの基本的な目的は「大勢の生徒たちが休み時間や放課後を健全に過ごす環境を提供する」ことです。ウグ郡のような遠隔地域でも麻薬や犯罪の誘惑があり、また貧困により劣悪な家庭環境下にいる生徒も多いです。ボール一つで大勢が参加できるサッカーは、非行や犯罪防止にもなり、彼らの健全な心身の成長を助けています。

最近は、トレーニングマニュアルの刺激もあり、サッカーをたんに楽しむだけでなく、生徒もコーチ（教師）も技術向上にも熱心に取り組むようになりました。また、女子の学校対抗トーナメントもできて、男女ともにやる気満々です！

今年もサッカープロジェクトへの暖かいご支援をどうぞよろしくお願ひいたします。

(TAAA南ア事務所 平林薰 久我編集)

[Page Top ▲](#)

2013-03-12 南アフリカ

ンドウェドウェ地域の学校を訪ねて



TAAAは、2007年から2010年まで、クワズールーナタール州ンドウェドウェ地域で、学校図書支援活動を行いました。また、JICA草の根技術支援として、2007年7月～2009年3月の間、同地域の小学校における健康教育と菜園プロジェクトを現地のパートナー団体と実施していました。

TAAA南ア事務所をウグ郡に移転し、活動拠点をウグ郡内に移してからも、ンドウェドウェの学校教師とは、時々連絡し合い、進捗状況を確認してきました。

2月28日に、図書活動と菜園活動がどのように定着、継続されているかを確認するために、久しぶりにンドウェドウェのムチャトウ小とシャラガシェ小を訪問しました。

どちらの学校も図書委員会、菜園委員会が設立されて、活動が継続、発展していました。

ムチャトウ小では担当のマテ先生が研修会に出席していて残念ながら再会できませんでしたが、一緒に図書活動を担当している先生が案内してくださいました。

畑の方も夏の収穫を終えて7年生が次の栽培の準備をしたところでした。日本から持ってきた小松菜とチンゲン菜の種を持って行ったので、ちょうどいいタイミングでした。

嬉しいことに、学校のフェンスのすぐ外に地域の人たちのコミュニティー農園ができていました。“学校の活動に影響されてコミュニティーの人たちも畑作りを活発に行うようになりました”と菜園委員の先生が話していました。

シャラガシェ小は、学校に図書室を作るスペースがなく、コンテナ図書室を寄贈した学校です。現在、コンテナ図書室は学校内の生徒だけでなく、高校生も参考書などを借りに来ることです。また、保護者にも公開しており、成人識字教育用の本も置いてありました。少しずつですが、学校から保護者を通して、図書活動がコミュニティに普及してきています。

図書担当のドゥーベ先生は、とても熱心に活動を続けてくれており、コンテナー図書室が有効に使われていることを確認しました。

(TAAA南ア事務所 平林薰)

[Page Top ▲](#)

2013-02-11 日本

日本の梱包作業の様子



本日は、野田さん。浅見さん。北爪さん。丸岡さん。高野さん。浦和学院高校の生徒さん2名。鯨井の8名が参加し、英語の本の梱包作業を行いました。

作業所は、アメリカンスクールとインターナショナルスクールから戴いた、英語の本が詰まった箱の山が堆く積まれており（廃校やE-books化によるもの）、作業するスペースを確保するのが一苦労するほどです。

先ず、南アフリカ事務所から、英語の本のレベル分け（児童用・生徒用・教師用など）梱包の要望が出ており、既に、分類されていた本の梱包作業から始めると同時に、次回のレベル分け作業が捲るよう、開梱作業も並行して行い、空いているスペースに英語の本をどんどん積んでいきました。

正午だったので、梱包作業を終了し、記念撮影を行い生徒さんは帰宅されました。 午後は、食事をしながらミーティングを行った後、 13：30には全ての作業が終了となりました。

しかし、北爪さんが、残業を志願され、午前の残りの梱包と、スペースを確保するための整理整頓作業をされました。北爪さん。ご苦労様です。

また、浦和学院の生徒さんが、後日、作業報告を学校に提出されるということで、作業の開始前に、昨年（2012年）20周年を迎えたTAAAの活動年譜を基に、今までの活動の歩みの概略を鯨井が説明いたしました。この活動年譜はHPでもご覧戴けます。→ [年譜](#)

(鯨井幸一)

[Page Top ▲](#)

2013-01-26 日本

1月12日にTAAA創立20周年記念報告会・レセプションを行いました



1月12日（土）、さいたま市の「与野本町コミュニティセンター」にて、TAAA創立20周年記念報告会・レセプションを行いました。毎年この時期には地元のさいたま市で報告会を実施しておりますが、昨年に創立20周年を迎えたことを記念し、ゲストの方々によるスピーチや、ささやかなレセプションも組み合わせて開催いたしました。

報告会に先立ち、野田・前代表／現事務局長と久我・現代表から、20年間の支援・協力のお礼と、今後に向けた挨拶をさせていただきました。野田事務局長は、20年間の歩みの概要を紹介し、久我代表は、あらゆる人種差別の禁止を明文化している南ア憲法にも触れながら、現在の課題について触れました。

平林・南ア事務所代表による報告では、当会の活動の3本柱である「図書支援」「菜園活動」「サッカー支援」の概要をお伝えいたしました。TAAAの原点である「図書支援」については、南ア政府も力を入れはじめており、「菜園活動」については、JICAのプロジェクトが終了しましたので、今後も現地で継続されることがポイントとなります。また、「サッカー支援」は地域の学校とTAAAのコミュニケーション強化にもつながっております。

現地の報告に続いて、ゲストの南アNGO「ウムトンボ」スタッフのサンディーレ・ムカディさんから、サーフィンを通じたストリートチルドレンの支援について、写真を交えながら報告していただきました。

休憩後はゲストの方々によるスピーチです。以下の方々から暖かいメッセージを頂戴いたしました。ありがとうございました。

- 株式会社商船三井 経営企画部 C S R ・環境室長 永田順一様
“図書輸送を通じた支援は、社内報を通じて知られており、社員の誇りです。”
- 特定非営利活動法人アフリカ日本協議会 事務局長 斎藤龍一郎様
“本を通じて、情報をどうやって伝えていくかが、大切だと思います。”
- アフリカ研究者 吉田昌夫様
“本は確実に喜ばれます。本の支援というのは、良い着眼点でした。”
- さいたま市議会議員 高柳俊哉様
“市民が市民に手を差し伸べることは素晴らしい、多文化共生が大切です。”
- 日本貿易振興機構アジア経済研究所研究員 牧野久美子様
“南アと日本は、今後、支援する・される関係から、課題を共有する関係になってほしいと思います。”
- 動く→動かす 代表 津山直子様
“TAAAは現地の山奥まで出かけていますが、遠い日本と南アがつながっていることが大切です。”
- T H A N球プロジェクト 代表 森直之様
“南アではサッカーのコーチや監督が不足していますので、雇用創出にも貢献していきたいです。”

最後に、短い時間ではありましたが、お菓子とソフトドリンクをいただきながら、参加者交流の場を設けました。

どうぞ今後ともご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

(丸岡晶)